

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19H01320

研究課題名(和文) 前近代ユーラシアにおける山岳フロンティアの歴史的研究

研究課題名(英文) Historical studies on the mountain frontiers of pre-Modern Eurasia

研究代表者

稲葉 穰 (INABA, MINORU)

京都大学・人文科学研究所・教授

研究者番号：60201935

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,200,000円

研究成果の概要(和文)：前近代ユーラシアにおけるフロンティアとしての山岳地域に関するフィールドワークと文献調査を柱とした本研究は、残念ながらコロナ禍のゆえに十分なフィールドワークを行えなかったが、その代替として、衛星写真の分析による遺跡と古代ルートの探査、代表者、分担者による、各時代と地域の山岳フロンティアに関する個別研究を進めた。その結果、険しい山岳地帯に散居する人々がどのような形で国家を形成し、その国家の動向に山岳地帯がどのような影響を及ぼしたかについて幾つもの興味深い論点が得られた。それぞれの論点を発展させたせいかについては個別論文あるいは論集として公開される予定である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ユーラシア大陸を東西に貫く山岳の帯に着目し、それがそれぞれの歴史世界、文化世界にどう影響したかという角度からの研究は、ユーラシアを内陸部と沿岸部に分け、遊牧民と定住農耕民の相互作用としてユーラシアの歴史を考えることとは別の方向性を示すことができる。人間集団の移動と越境は、各地域に新しい活力と文化を生み出したと理解されるが、それが単に水平方向の移動だけでなく、重力に逆らった垂直方向の移動をも包含することを考慮することで、前近代史研究に新しい可能性が開かれる。

研究成果の概要(英文)：This research project, which was designed to conduct fieldworks and research of literary sources regarding mountainous regions as frontiers in pre-modern Eurasia, unfortunately, couldn't carry out sufficient fieldworks due to the COVID-19 pandemic. As an alternative, the studies progressed by analyzing satellite images to explore ancient ruins and routes. Individual studies on mountainous frontiers of different eras and regions were carried out by the members of the project. As a result, several intriguing issues were discovered concerning how scattered communities in rugged mountainous areas formed states and the impact of these mountainous regions on the dynamics of those states. Each of these issues will be further developed and published either as individual papers or as a compilation in a special volume.

研究分野：中央アジア史

キーワード：フロンティア 山岳 越境 ユーラシア史

1. 研究開始当初の背景

<フロンティア研究>

フロンティア = 境界領域とは、人間の営む社会、共同体あるいは国家の領域と、その外側との間を分かちつものであり、集団としてのアイデンティティを意識する手掛かりとなるものでもある。大雑把に言えば、それは人間が集団生活を営み始めた頃に遡ることができる歴史的概念であり、そのような集団は、たとえば古代中国の封 (= 邦) のように、自分たちの生活圏を、その外側にある、あるいは外側から来たりうる何者かから守るために境界領域を設定しようとした。もちろんこのようなフロンティアの意味するところは、境界領域の両側にある社会集団がそれぞれ発展し、様々な形態をとるにつれて時間的に変化し、また境界領域が設定された場所の地理的条件によっても外見や機能を異にしたと想定しうる。

そのようなフロンティアは、特に 19 世紀末 Frederick J. Turner によるアメリカ西部フロンティアに関する研究以降、歴史研究の対象として注目されるようになった。当然それはまずアメリカ史の文脈で議論されたが、同時にヨーロッパ史においても関連する考究がなされた。特に後者においては中世・近世国家の間のフロンティアがどのような性格を持ち、いかなる機能を果たしたかという点について、アメリカ史とは異なる視覚からの分析がなされた。すでに O. Lattimore は異質の共同体間のフロンティアと同室の共同体間のフロンティアを区別し、L. Kristoff (分離する境界と包摂する境界)、D. Power (政治的障壁としてのフロンティアと入植のフロンティア) も同様にフロンティアの中をさらに峻別する必要を指摘した。

<山岳社会研究>

一方どちらのタイプのフロンティアであろうと、山岳や河川などの自然地形が境界を形成する障壁となることは、かつては当然のことと見なされていた。しかし Lucien Febvre や Peter Sahlin は近世近代のフランスを例に、フランスの自然境界という概念はフランス王国・共和国の領土拡張を正当化するために歴史的に構築された言説であると批判し、山や川、時には海が人や物、情報の交流にとっての障壁であったとする単純な理解に反省を迫った。そうしてフェーブルらは、フロンティア自体ではなく、それを挟んで対峙した国家、社会、集団の歴史こそが重要だと主張し、結果として一時は自然地理的境界としての山岳に対する関心はさほど高いものではなくなった。

しかしながら今世紀に入ってこれとは異なる研究動向が現れてきた。東南アジア大陸部の山岳地帯を対象とする W. van Schendel や、J. Scott らによる「ゾミア」研究である。東南アジアの平地と山岳地帯それぞれの社会、共同体の間の差異を認識し、後者に関する研究を進めること、さらに山岳社会にある種の非国家的空間を看取しようとするこれらの研究は、賛否両論を交えて議論を呼んでいるが、そのような空間は当然より西の方にも広がっている可能性も指摘される。しかしそれに対応する顕著な研究はいまだ現れていない。

2. 研究の目的

そこで本研究は以下の 2 つの問いに答えることによってカラコルム/ヒンドークシュ山脈からコーカサス山脈におよぶ、中央アジア、南アジア、西アジアを隔てる山岳地帯の自然地理的フロンティアの多義的性格と歴史的意義の検討、および山岳社会事態の持つ特質や歴史的機能の解明を目的として計画された。

<第一の問い：分離するフロンティアと包摂するフロンティア>

以上のような研究状況を踏まえて、本研究では大きく二つの学術的問いを立て、これを解明すべく研究を行う。第一の問いは、上述のクリストフの表現を借りるなら、フロンティアが「分離」と「包摂」という相反する機能を持つ点に関わる。確かに我々が特定の境界領域について議論する際、あるときはそれを政治的軍事的障壁と想定し、またあるときは境界の両側の国家・社会の間の接触や交流のチャンネルとなるフロンティアの機能に焦点をあてる、というのは珍しいことではない。ではなぜフロンティアはこのような異なる機能を併せ持ち、どういうときに分離的に、どういう場合に包摂的に機能するのであろうか。もちろんこれを解明するには、そもそも異なる種類のフロンティアがあるのか、あるいは一つのフロンティアが歴史的な文脈の中で分離的にも包摂的にも働くのかを考える必要があるが、これについては第一に歴史的な事例をなるべく多く集め、それらを慎重に比較検討する必要がある。

<第二の問い：山岳社会の形成と歴史的機能>

一方第二の問いは山岳社会のあり方に関わる。すなわち、フェーブルらが退けた自然地理的境界が実際に歴史上どのような役割を果たしたのか、そこにスコットらの指摘する山岳社会の特質がどのように関わってきたのかを、ヒンドークシュ、コペトダウ、アルプルス、コーカサスの山脈群を対象として考えるというものである。近年歴史研究に急速に用いられるようになってきた古気候学や遺伝子研究など自然科学的データが、気候条件と山岳の問題、あるいは遺伝子分布における地理的条件の重要性などを指し示していることもこの点に大きく関わるだろう。

この二つの問いは前近代という時間枠の中で主に研究される。その理由は、端的には研究代表者である稲葉穰が古代末期から中世初期の時代を専門にしているからであるが、もう一方で、ほ

ば近現代についてのみ語られ、研究されてきたフロンティアについて、より長い時間枠で情報を集め比較検討することにより、(ゾミア研究が指し示すような)近代や国民国家といった枠組みから自由な研究が可能になるのではないかという予測を持つゆえでもある。

3. 研究の方法

将来的にユーラシア大陸規模での比較研究へとつながるよう、本研究では以下の点について特に留意し、研究の方法と方針を策定した。

山岳フロンティアの分離的機能と包摂的機能(あるいは連結的機能)のあり方

山岳社会の形成のプロセスと、近隣社会との関係

各山脈を越えるための峠についてフィールドワークと文献資料の統合的理解

上記の点を検討説明するための方法として、第一に出土資料情報の収集と精査、文献資料(文書資料、年代記資料など)の内容の再検討に基づくケーススタディをそれぞれに地域に関して蓄積するという方法を採用。最終的にはそれらのケーススタディに基づき、内容の比較を行った上で上記二つの「問い」に答えることを目指した。

第二に、可能な限り対象の山岳地帯を訪れ、道や峠のあり方について観察し、記録を行うことを計画した。人や物の移動を考える場合、そして逆にそれらが阻害される状況を想定する場合、実際にその場所を見、360度観察するにしくはないと考えたからである。三年間をかけて、イラン、インド、アゼルバイジャン、ウズベキスタン、トルクメニスタン、タジキスタン、アゼルバイジャン、トルコにおいてフィールドワークを実施、またそれらの調査結果と推進状況を報告するための研究会を随時開催し、最終年度には主たる二つの問いに関するシンポジウムを組織しようとして計画を立てた。

4. 研究成果

実際には、本研究の眼目であった山岳地帯でのフィールドワークは、初年度と延長をした四年目を除いて実施できなかったうえ、四年目のフィールドワークも様々な制限のもとで行われた。それでも実施できなかった代替として衛星写真によるイラン・イスラム共和国ダルフガズ近郊の遺跡とルートの探索、および代表者、分担者が個別に山岳地帯毎に総合的研究を実施し、その成果を定期的な研究会で報告した。以下は各メンバーの研究の成果の一端である。

(1) インダス文明と BMAC との歴史的関係(小茄子川歩担当)

コペト・ダグ(Kopet Dagh)・マルギアナ(Margiana)・バクトリア(Bactria)を中心とした中央アジアとインダス平原間の、前4千年紀前半～前2千年紀前半にかけての通時的な歴史的関係性について、当該科研究費の研究テーマである「山岳フロンティア」の人類史的意義に焦点をあて、両地域間をむすんでいた山岳ルートの復元を試みつつ考察することを目的とした。とくに注目したのは、紀元前2600～1900年ころに現在のパキスタンとインド北西部に展開したインダス文明社会と、それと併行する時期に中央アジアに展開したバクトリア・マルギアナ考古学複合(Bactria Margiana Archaeological Complex = BMAC、オクス(Oxus)文明)との関係性であるが、両地域間に存在した歴史的関係性と山岳ルートを、通時的に検討するためにそれと前後する時期の様相についても概観した。

当該時期・地域の歴史復元においては、文字資料はあまり頼りにならないことから、考古資料にもとづいた分析が必須となる。したがってコペト・ダグに位置するナマーズガ・デペ(Namazga Depe)やアルティン・デペ(Altyn Depe)、マルギアナに位置するケレリ(Kelleli)やゴヌール・テペ(Gonur Tepe)、トゴロク(Togolok)、バクトリアに位置するサパリ(Sapalli)やダシュリ(Dashli)、そしてアフガニスタンのショルトウガイ(Shortugai)などの代表的な遺跡に焦点をあて、最新の編年研究の成果にもとづきつつ、それらの遺跡から出土した遺物のあり方からインダス平原との関係性を考察するという方法をとった。

出土遺物はさまざまであるが、両地域の関係性を考察するうえでは、土器、土偶、そして印章がとくに重要となる。両地域に通時的に認められるこれらの遺物については、モチーフや形状などの側面で類似点がみられる場合もあり、さらにインダス式印章がゴヌールやショルトウガイから出土したり、BMAC系の印章がハラッパー(Harappa)やモヘンジョダロ(Mohenjodaro)、チャヌフダロ(Chanfudaro)などから出土したりと、出土数はすくないものの、両地域の関係性を直接的・間接的に実証する証拠となる。

インダス平原側の出土地域をみると、そのおおくは、バヌー(Bannu)やトチ・ゴーマル(Tochi-Gomal)、クエッタ(Quetta)、カッチー(Kachi)などのパローチスターン(Balochistan)丘陵にある峠の端、いわゆる「山岳フロンティア」に通時的に集中するようにみえる。インダス川流域でも散見されはするものの、中央アジアとの関係性を示す遺物のおおくが、「山岳フロンティア」を通過せずにこの地にとどまっているという状況は、こうした特定地点の歴史的意義を考究するうえでも興味ぶかい。両地域間に存在した山岳ルートの起点かつ終着点の一つであったと想定される「山岳フロンティア」は、異文化・社会間の接触領域であると同時に、緩衝地帯すなわち「バッファ」としての位置づけも可能であるかもしれない。

両地域は前4千年紀前半～前2千年紀前半にかけて、通時的に関係性を有していたことは確実である。出土遺物の様相からは接触の頻度は高くはなかったものと想定されるが、両地域間に存在した山岳はけっして越えられない障壁などではなかった。カイバル(Khyber)やポーラン

(Bolán)などの峠道を通るルート、クエッタからゴーマルにぬけるためのジョーブ・ローラライ(Zhob-Loralai)経路のルートなど、地図上にあり得そうな山岳ルートを描くことも容易である。しかし両地域間をむすんでいた山岳ルートを実証的に復元し、その変遷をおうには、考古資料にもとづいた分析のみでは不十分である。したがって19世紀ころに書かれたパロースターン関連の踏査・旅行記をフィールド調査の代わりにし、その結果を考古資料とつぎあわせたり、またヴェーダ文献等を「言語的・テキストのパラメーター」として扱い、そこに記された地名などを追求するかたちで、両地域間に存在した山岳ルートの復元を試みることも今後の課題となる。

(2) コーカサス山脈南麓における山岳民共同体の形成過程(塩野崎信也担当)

塩野崎が研究対象としたのは、コーカサス山脈である。とりわけ現在のアゼルバイジャン共和国領内に位置する山脈の南東部とその周辺地域に焦点を当て、同地の山岳民の生業や社会構造、平地民との関わりを歴史学的手法を用いて分析した。年代記などの史書でこれらの山の民たちが大きく取り上げられることは少ないが、各種史料の断片的な記述を拾い上げて付き合わせることで、ある程度の歴史的事実を復元することができる。

山岳民の生業についてまず考慮しなければならないのは、彼らが居住する土地の農業生産力の低さである。そこで、それを補う産業が必要となる。そういった産業として最初に挙げられるのが、金属加工業で、例えばラフジュ村は伝統的に銅細工が盛んであり、武具の生産も担っていた。一方でこの村は、16世紀に政治的な事情でカスピ海南岸のギーラーン地方からの亡命した人々が隠れ住んだことで成立したという特殊な事情を有している。ラフジュの事例を一般化することは難しいかもしれない、今後さらに他の事例を調査する必要がある。

コーカサスの山岳民にとってより一般的な生業は、掠奪や誘拐であったろう。実際、例えば18世紀後半に山岳民が起こした掠奪・誘拐事件が非常に多く記録されている。ドイツ出身の植物学者で、この地方に関する貴重な旅行記も残したグメーリン(Samuel G. Gmelin, d. 1774)も、コーカサスの山岳民に誘拐され、非業の死を遂げた。また山岳民は、周辺の平地を統治する地方君主などに傭兵として雇われることも多かったようだ。傭兵稼業と掠奪・誘拐とが表裏一体の関係にあり、山岳民による掠奪・誘拐事件の発生件数と傭兵を雇った地方君主による遠征の件数に負の相関がみられることも明らかになった。

山岳民のこのような側面に関する傍証としては、史書や文学作品における彼らの表象を指摘できる。コーカサス全体に見られる尚武の気風、山岳民の勇猛さは繰り返し語られている。

山岳民の社会構造、平地民との関わりについては、アゼルバイジャン北西部に勢力を築いていた「ジャール・バラキャン共同体(Jamā'at)」を取り上げて、分析を行った。ジャール・バラキャン共同体は山岳民と山麓の平地民で構成された小国家で、16世紀頃に成立し、19世紀にロシア帝国の支配下に置かれるまで、周辺諸勢力から独立した勢力を保っていた。「共同体」というのは史料中でも使われている表現であるが、こう呼ばれるのは、この国家が山岳民の有力者による共和制を採っていたからである。ジャール・バラキャン共同体は、アヴァール人、インギロイ人、サフル人、テュルク人(アゼルバイジャン人)という4つの民族集団を内包する。そして、ジャール共同体、バラキャン共同体、カテフ共同体、タラ共同体、ムハーフ共同体、ジヌフ共同体の6つのサブグループから構成される。これらの共同体を構成する村落を分析した結果、いずれの共同体も川筋に沿って形成されること、川の上流部を占める山岳民が下流部の平地民を支配する構造を有していることが明らかになった。その結果、ジャール・バラキャン共同体については、山岳民同士の「横」のつながりに着目する従来の理解ではなく、サブグループごとの山岳民と平地民の「縦」のつながりを軸に理解する必要があるのではないかという展望が得られた。また、両者の関係が片利共生的か相利共生的か、川筋に沿った共同体形成はどこまで一般化しうるものなのかなども、今後の研究を通じて明らかにすべき点である。

(3) イラン高原山岳地帯における都市の立地と連絡ルート(春田晴郎担当)

春田が研究対象としたのは、古代とくにハハーマニシュ朝(アカイメネス朝)およびアルシャク朝(アルサケス朝)時代のイラン高原山岳地帯における周辺都市の立地やそれを繋ぐルートについてである。東北部のコペトダグ、北部のアルボルズ、南西部のザグロスの3山脈について概略を述べる。

コペトダグ山脈はカスピ海の東から北西-南東方向に走る山脈であるが、その北東側には、ニサ、アビーヴァルド(ダルギヤズ)といったアルシャク朝パルティア時代にも栄えた都市が存在する。ニーシャープールが建設されるサーサーン朝以前、メソポタミアと中央アジアを結ぶ交易路(ホラーサーン道)は西から進むとゴルガーン平野にいったん下り、それからコペトダグ山脈とアーラーダグ-ピーナルロード山脈に挟まれた平地をそのまま南東に進んでいたが、ニサやダルギヤズへは途中のゲーチャーンから折れてコペトダグを越える比較的険しいルートを通らないといけない。とくにアルシャク朝前期の宝庫があったニサへのルートは現在の国境近くのイラン側地名バージギーラーン「税関」が示すように狭隘な地を経ていく。ダルギヤズの立地は、ユスティヌスがアルシャク朝初期の都として記すアビーヴァルド地域にあるダラの記述とよく一致する。ダルギヤズはコペトダグ北東麓ながらイラン領であるため、イラン人以外の研究者にあまり注目されていないが、低い支脈を挟んでのアビーヴァルドと合わせて、アル

シャク朝時代とくに初期から前期に重要な役割を果たしていたと思われる。アナウ、ナマーズガ・テペという青銅器時代の著名な遺跡が示すように、古代から居住のあったニサ、アビーヴァルドなどの中規模オアシスが、遊牧的な色彩の強かった初期のアルシャク朝の征服者に対して都市文化に習熟する場を与えていたことが予想される。

アルボルズ山脈はイラン高原の北部、カスピ海の南部を東西に走る山脈で、湿潤な北麓側と乾燥した南麓側と、山脈の両側で明瞭に気候、環境が異なる。南から山脈を越える主要ルートとして、山脈の西端近くで山脈を貫いて北に流れるセフィードルードに沿うルート、山脈のやや東側でサーリーへと抜けるルート、山脈の東端近くでゴルガーン平野に下るルートがある。2番目と3番目のルートの間には、山脈の標高もあまり高くなく、南麓にセムナーン、ダームガーンという比較的重要なオアシス都市を擁する区間もあるが、ここを南北に貫くルートは歴史的にそれほど重要な役割を果たしたようには見えない。このセムナーン、ダームガーン間のダームガーンよりはアルシャク朝時代に栄えたギリシア名ヘカトンピュロスという都市があるが、立地的になぜここなのか十分に満足できる説明は与えられていない。アレクサンドロスの東征時にも存在していたので、都市の歴史はさらに遡る。「ヘカトンピュロス」は「百門(の町)」という意味であるが、キャヴィール沙漠を越えるルートがそれほど盛んだったとも考えられず、本当に百の門を擁するほどの要衝の町であったとは想定しにくい。セムナーン～ダームガーン間の特徴として、両都市を結ぶ沙漠北縁を通るルートからアルボルズの支脈(主脈と標高はほぼ等しい)を挟んで北側に比較的広い谷が並行して走っていることが挙げられる。この谷が遊牧民にとっての場を提供していた可能性を検討する必要があるだろう。

ザグロス山脈は、イラン高原を北西から南東に走る多くの並行する支脈から成る山脈である。支脈の間に平野が広がっている所も多く、ハハーマニシュ朝(アカイメネス朝)やサーサーン朝といった大帝も、このザグロス山間部が発祥の地である。ところで、ハハーマニシュ朝(ここではクラシュ/キュロス・カンブジャ/カンピュセス時代も含める)の成立状況はよく分かっていない。とくにペルセポリスなどが位置するマルヴダシュト平野に同朝成立直前の時期ほとんど集落址が報告されていないことは、この国がどこから興ったのか謎めいたものにさせている。ペルシア、それに先行するエラム、メディアについて、マルヴダシュト(ペルセポリス)、スーサ、エクバタナといった都市を想起してしまうと、各都市はかなり離れていて、クラシュ/キュロスの立ち位置もよく分からなくなる。しかし、三者ともザグロス山地の周縁部、ヤースージュ、イーゼ、ネハーヴァンドあたりを中心の一つとする諸勢力と考えれば、現在のパフティヤリー族の活動範囲とも大きく違わず、後代のザンド朝とも比較できる。こうしたザグロス山脈周縁部諸勢力の統一が、ペルシア帝国の第一歩になったのではないかという仮説も検討に値しよう。

(4) 障壁としての山岳とチャンネルとしての山岳(稲葉稯担当)

稲葉は、同じくイラン高原北辺のコペトダウ山脈が11世紀の政治軍事状況(セルジューク族とガズナ朝の抗争)の中でどのように用いられたかを、同時期のヒンドゥークシュ山脈と比較して検討した。そこで浮かび上がったのは、障壁としての山岳は通常それを迂回して通行することを要求するが、様々な場合に緊急避難的に直線的な山越えをするルート、ショートカットが準備されていたように見えることであった。たとえばセルジューク族のトゥグリル・ベグはガズナ朝軍に追われた際、通常のゴルガーン方面もしくはサラフス方面ではなく、やや困難なダルギヤズ道を通して北に逃れた。一方セルジュークに敗北したガズナ朝はヒンドゥークシュを越えた的の攻撃を防衛するために、ハヴァク峠やシバル峠という通常のルートだけでなく、サラング峠越えルートも警戒するために、現在のパルワーン近辺に大軍を配備した。これらから、通常のルートと緊急避難的あるいは副次的ルートが、ある面では障壁としての山岳とチャンネルとしての山岳という相反する性質に対応するのではないかと考えた。しかしこのことは数多くの事例検討とフィールドワークによって検証されねばならず、その目的で2022年夏、キルギス共和国のイシク・クル湖周辺にフィールドワークを実施した。天山の主脈によってタリム盆地と隔てられ、イリ・アラタウ山脈によってカザフ草原と隔てられたイシク・クル湖は古くから東西交易ルートの主要チャンネルとして知られていた。言うまでもなく騎馬民が移動する際にはカザフ草原側(セミレチエ方面)あるいは天山南麓の方が高低差がなく移動が容易い。しかし、イシク・クル湖北岸の切り立った山岳の麓には古代遊牧民のものと見られるクルガン墓のクラスターが存在し、湖沿いの低地を往来するために南北および東方向にある天山の支脈を越えて移動した遊牧部族がいたことがうかがわれる。イシク・クル湖の南北のルートを山岳障壁を迂回する道、イシク・クル湖周辺を副次的ルートと考えることが相応しいかどうかは、現在進行中のアクベシム遺跡の調査などの結果を待って考察せねばならないが、文献で見える姿と実際の高地越えルートの用いられ方にはやはりギャップがあるようにも見える。コペトダウやヒンドゥークシュに近い山岳障壁の事例をより多く集めることで、障壁でもあり連絡チャンネルでもある、という山岳フロンティアの性質をどのように理解し、説明すればよいかという大きな問いに答えることができる筈である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Ayumu Konasukawa	4. 巻 1
2. 論文標題 Comparative Analysis on the Seal Carving Techniques of the Early Harappan and the Mature Harappan Periods: Preliminary Observations through SEM and PEAKIT	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Culture, Tradition and Continuity	6. 最初と最後の頁 143-155
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小茄子川歩	4. 巻 35
2. 論文標題 インダス文明と「亜周辺」における社会進化--パッフア・都市・文明・国家--	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 季刊考古学	6. 最初と最後の頁 35-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 塩野崎信也	4. 巻 80-3
2. 論文標題 ロシア帝政期南東コーカサスの離婚裁判 : 2度結婚した後に2度離婚した未婚女性の事例	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東洋史研究	6. 最初と最後の頁 548-513
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 塩野崎信也	4. 巻 95
2. 論文標題 ロシア帝政期のヌハ郡におけるスンナ派モスク教区の人口推移	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東洋史苑	6. 最初と最後の頁 21-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 春田晴郎	4. 巻 3
2. 論文標題 西アジアの古代都市	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 岩波講座世界歴史	6. 最初と最後の頁 163-184
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件 (うち招待講演 5件 / うち国際学会 5件)

1. 発表者名 Minoru Inaba
2. 発表標題 On the temple of Sakawand
3. 学会等名 Regional History of South Asia in Light of Archaeological and Textual Sources (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Minoru Inaba
2. 発表標題 On some historical routes between the Afghan highland and the Indus valley
3. 学会等名 Cultural History of the Shahi Kingdoms (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Seiro Haruta
2. 発表標題 Erasing the Past: Re-engraved Bas-reliefs and Inscriptions during the Parthian Period
3. 学会等名 Online International Conference for the Iranian Archaeological Webinar (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Ayumu Konasukawa
2. 発表標題 The Chronology of Indus Seal Production in the Ghaggar Basin
3. 学会等名 49th Annual Conference on South Asia: "Seals and Sealings of South Asia: Indus to Early Historic Period (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Ayumu Konasukawa
2. 発表標題 Preservation of the monuments in Japan and their significance with personal experience as a former ICCR scholar
3. 学会等名 Protection of the Monuments and their significance for Preservation of National Heritage (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 稲葉 穰	4. 発行年 2022年
2. 出版社 臨川書店	5. 総ページ数 270
3. 書名 イスラームの東・中華の西	

1. 著者名 北條芳隆・小茄子川歩・有松唯 (編著)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 雄山閣	5. 総ページ数 152
3. 書名 社会進化の比較考古学--都市・権力・国家--	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	小茄子川 歩 (Konasukawa Ayumu) (20808779)	京都大学・アジア・アフリカ地域研究研究科・客員准教授 (14301)	
研究分担者	塩野崎 信也 (Shionozaki Shinya) (70801421)	龍谷大学・文学部・講師 (34316)	
研究分担者	春田 晴郎 (Haruta Seiro) (90266354)	東海大学・文化社会学部・教授 (32644)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関